



まちと劇場の未来をひらくー神戸文化ホールの新しい挑戦ー 新ホールに関する公開フォーラム Vol.0

[実施概要]

開催日時：2026年1月31日（土曜）14時00分～16時20分

会場：アンカー神戸 イベントスペース

●第2部：パネルディスカッション（15時00分～16時20分）

文化を育てる劇場の力-創造活動を支える仕組みとは？未来の文化をどう育てる？-劇場とまちの新しい関係

- [パネラー]
- 伊東正示（株式会社シアターワークショップ代表）
 - 林健次郎（公益財団法人宮城県文化振興財団 新県民会館開設準備室 室長）
 - 壺田かいち／ういか（劇団温冷兼用）
 - 楠元花実（神戸大学大学院 人間発達環境学研究科修士課程／ピアノ奏者）
 - 甲南一座（甲南大学文化会演劇部）
 - 田中 凜（神戸大学 国際人間科学部／フルート奏者）
 - 中村圭吾（劇団アンゴラ・ステーキ主宰／脚本・演出）
 - 美山青空（神戸大学 国際人間学部／ジャズ・ベース奏者）

[ファシリテーター] 草加叔也（有限会社 空間創造研究所）

第2部 パネルディスカッション レポート

[取材・文] 狩野哲也 [写真] (公財) 神戸市民文化振興財団

まちと劇場の未来をひらく—創作活動を支える仕組みとは？

第1部では、株式会社シアターワークショップ代表・伊東正示さんによる「人びとの想いを集めて、ホールをひらき、まちにつなげる」と題した基調講演がありました。基調講演では、時代の潮流によってホール・劇場がどんなふうになってきたか、ホールとまちや住民との関係はどうあるべきかについてお話いただきました。

第2部のパネルディスカッションは、劇場計画コンサルタントとして活躍する空間創造研究所の草加叔也さんがファシリテーターを担当し、進行しました。また、第2部前半には、2029年春頃の開館を目指して新しい劇場の整備を県と一体的に進めている、公益財団法人宮城県文化振興財団の林健次郎さんが自身の取り組みを紹介。草加さんは「新しい劇場をつくる上で、どんなことを考え、どうつくっているのかを参考にさせていただく」と、第2部前半の趣旨を話しました。

文化を育てる劇場の力 創造活動を支える仕組みとは？

林さんは宮城県立劇場（宮城県民会館とNPOプラザの複合施設の名称）が移転再整備されるホールであることと、大きな震災を経験したことが神戸市との共通点とあげ、「互いに新しい劇場のヒントが見つけれれば」と最初に語りました。

宮城県立劇場の計画の特徴

現在、宮城県仙台市青葉区にある宮城県民会館は1964年に開館。1590席の大ホールがあり利用率80%近くの高稼働ですが、2021年に移転、再整備する基本構想が発表されました。



移転・再整備される「宮城県立劇場」の外観パース。

1枚屋根で大ホール、中ホール、小ホールが並び、全てのホールがグラウンドレベルにあります。



上空からのパース。

基本構想からスタート

林さんは「神戸市と同じく、宮城県も基本構想からスタートし、起工式まで5年はかかった」と語りました。2023年7月に宮城県は管理運営方針を策定し、その中で林さんが所属する宮城県文化振興財団をホールの運営をする指定管理団体として指名することが示されました。



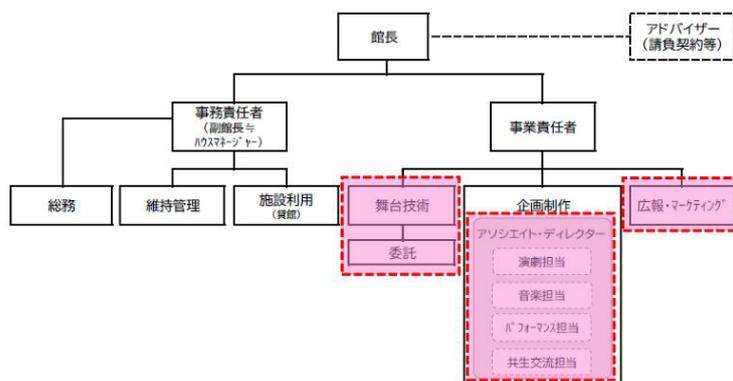
1月13日の写真「だんだん形が見えてきて、興奮しているところです」と林さん

神戸市と同じく地震に敏感な土地柄であり、基礎免震構造とするために地面を掘削し、そこに基礎を浮かべて建物をつくるので、穴を半年以上掘り続けているのだとか。今までは設置条例を整理したり、運営コストや組織をどうしていくのかななどを準備中で、来年から組織体制づくりやプレ事業等で忙しくなるそうです。

組織体制のイメージ

将来的な組織体制についても言及します。

将来の組織体制イメージ 管理運営計画より



「49名の運営組織にするのが宮城県の計画です。特徴としては、舞台技術の部門を内製と外注と組み合わせながら運営するというのが1つと、もう1つは広報、マーケティングの部門が独立していることです。前職の愛知県芸術劇場もそうでしたが、新しい劇場でも必要な部門と考えています。」

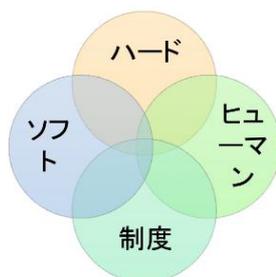
もうひとつの特徴は企画制作のグループにアソシエイト・ディレクターというポジションがあること。

「県内で活動している若手アーティストを演劇、音楽、パフォーマンス、共生交流担当に任命して、私たち職員と一緒にいろんなところで企画制作をやってもらう予定です。愛知県の『長久手市文化の家』での創造スタッフという制度を参考にしています。」

現・宮城県民会館は16名で運営しているが、準備室ができてからは20名の体制となり、来年度は少し増えて、最終的に49名になるといいます。課題は人材の確保だと再び強調します。

持続可能な劇場を目指して

- 日常的な運営を想定した設計
- 情熱や使命感だけに依拠しない作品づくり
- 根性論だけでない若手育成
- 破綻しない建前のない制度設計



- 準備室のメンバーは、「夢見るリアリスト」として、日々頑張っています！

「日本が少子高齢社会になっていく中で気に留めているのは持続可能な劇場にすることです。完成は2029年。それから10年経つまでに日本の労働力人口は激減し、さらに10年経つと日本の人口は1億人を切ります。世代交代が進む中で、さまざまな制度設計をするときに、今までの林の価値観ではない価値観で考えないといけないんです。理想と現実の両方を追いかける“夢見るリアリスト”というのが自分に課せられたテーマです。」

最近、林さんが意識するようになったという要素はこちらの4つです。1つは建築、動線の設計。もう1つは舞台設備。どういう機材を選んでいくか。もう1つは運営。どういうルールをつくっていくか。最後が人的体制。どうやって人数を確保していくか。この4つの要素を融合して昇華させることの難しさを痛感しているところであり、どうなるか2029年春の開館を心待ちにしてほしいと語りました。

神戸の若手パネラーたち

草加さんは「林さんの話を聞いた上で、自分たちの活動を含めて、新・神戸文化ホールでどんな使い方ができたら、どんな支援やサービスがあれば自分たちの活動はもっとアクティブになっていきそうか」と神戸で活躍する若手のパネラーたちに問いかけました。ここからはパネラーのひとりひとりが語った内容の一部を紹介していきます。

楠元さん「ホールの貸し出しシステムが学生には使いづらい」

楠元花実さんは神戸大学大学院でアートマネジメントを専攻し、国際ピアノコンクールを通じた地域活性化を研究中です。神戸文化ホールでは2025年の神戸国際フルートコンクールでインターンシップとして携わられました。学部時代には合唱団の団員としてホールの予約をするのが大変だったと振り返ります。

「定期演奏会を開催する1年前にホールの日程を押さえてくても抽選なので、実際に現地に行く必要があり、かなり大変だったという印象があります。ダメだった場合、他のホールを押さえないといけないのですが、貸し出しシステムがホールごとに違うので、音楽団体にいた身からすると別のホールと提携して一括で予約できればありがたいと感じました。」

会場では「うんうん」と楠元さんの経験談にうなづく若手や学生たちの様子が見受けられました。

他にも聴衆としてホールに行くことを考えるとチケットの金額が学生には高いため、映画館の半券を近隣の飲食店に持っていけば割引があるように、ホールに足を運びやすいサービスがあればよいと語りました。

草加さんが楠元さんの発言を受けて、会場の参加者にアートマネジメントについて少し解説を加えました。

「アートマネジメントは、アーティストと受け手（観客・鑑賞者など）を結びつける仕事だと思ってく

ださい。彼女のように、アートマネジメントを専門にする職能を、今、日本の大学の中でも育てようとしているということです。ぜひ若い人たちにつなげていてもらいたいです。」

壺田さん「劇場による上演機会の提供があればうれしい」

壺田かいちさんは2022年創部の甲南女子大学の演劇部「劇団 Ortensia（オルテンシア）」から派生して生まれた「劇団温冷兼用」を主宰されており、「自分自身の欲をたくさん話したい」と語りました。

「新・神戸文化ホールの中で、劇場による上演機会の提供があればうれしい」と話し、ご自身が演劇活動や観劇で訪れる場所が兵庫県内では豊岡市や、大阪、京都と分散されている中、神戸市を含む兵庫県の南側の割合が少なく感じているそうです。

「いろんな団体が集まる機会や、1つの劇団をピックアップして、ホールが支援して上演するような機会が神戸にもたくさんあればと考えています。自分自身、大阪の扇町ミュージアムキューブで行われた大阪学生演劇祭に参加し、演劇の4団体が集まって、上演して、全国に行く団体を決める企画だったのですが、それがものすごく楽しくて。大学で土日の公演ができないのでお客さんを呼ぶのに苦労したり、外部の方と繋がる機会が少なく、立ち上げた時も広げ方に悩んだのですが、演劇祭に参加したことで悩みが解消されました。そういった催しが神戸でもたくさんあればうれしいです。」

また、伊丹市のA I・H A L Lのショーケースに参加した際は、参加特典として稽古場の提供もあり、楠元さんと同じく、会場を押さえるのが難しいのでありがたかったと話します。続けて兵庫県立尼崎青少年創造劇場 ピッコロシアターでのアルバイト経験についても語りました。

「ピッコロ劇団では子ども向けの劇を上演する機会がたくさんありますが、観客の反応の中で本当に心から感動して、今後演劇をどんどん見ていきたい、続けていきたいという声もありました。そういう声が生まれる機会がないとまず広がらないと思うんです。ぜひ最初の種まきの段階もこのホールにどんどん担っていただきたいです。」

草加さんは「稽古場支援やインターンのように、プロと一緒に作品をつくる経験も若手の人たちにとってはいい機会になるだろう」と語りました。

中村さん「大学生とベテランのクリエイターが交わる機会になれば」

関西学院大学の中村圭吾さんは劇団アンゴラ・ステーキを主宰し、戯曲の執筆や演出、舞台演出に加えて、音響や舞台美術、広報など、舞台ができあがるあらゆる過程を体験して、その価値を創出することに楽しみを覚えているといいます。中学校から演劇活動を行い、高校時代は灘区のイカロスの森という小劇場で旗揚げ公演をしたことから神戸のまちに恩があり、恩返しのため何か形になるような話ができればと語りました。

「2025年9月に主宰劇団で大阪の千林商店街に新しくオープンしたスモールシアターKIKIという40人ほどのキャパの劇場で柿落とし公演を行いました。元々倉庫だった場所ですが、その空間を劇場に変え

るという設計段階から関わりました。3週間の公演中、例えばステージの位置を変えて観客との関係性を再構築したり、横のカフェをバーにして終演後にお客様と話しができる空間をつくるとか、商店街を実際に歩いて戯曲をつくるワークショップを行うなどしました。こうした経験から、私は演劇をつくるためには劇場とまちと創作者とお客様が1つになることが大切だと考えています。新・神戸文化ホールも発表の場だけではなく創作の場となればと私は考えています。」

中村さんは創作の場にするための3つの視点を話してくれました。

1つはコミュニティが交わるという視点。「神戸は演劇に限らず、ジャズやダンスなどベテランのクリエイターが集まる特殊な場所なので、若手の大学生とベテランの人が交わる機会になるような場所になれば」と語りました。

2つ目が滞在型の創作。「例えば城崎国際アートセンターのように、アーティストが街に滞在してクリエーションを行う。多様な文化が交わる神戸だからこそ、アーティストが街を歩いてリサーチすることで特殊な意味が生まれます。」

3つ目は演劇がステージ以外でも成立するという視点。「例えば、神戸の東遊園地はもちろんですが、三宮プラッツという音楽ができる場所があります。こういった開かれた空間を利用して、市民が演劇を上演だけでなく、演劇という手法を使って何かをするような企画の拠点がこの劇場にあればうれしいです。」

ほかにもバリアフリーに関する事など、さまざまな話題提供がありました。

民野さん「観劇後に気軽に話せる空間がほしい」

甲南大学の演劇部「甲南一座」に所属する民野総也さんは中高、大学と演劇活動をしてきた経験から「大学生が参加できる演劇の大会がほしい」と語りました。

「演劇の大会は伊東さんの話にあったサードプレイス、フォースプレイスと親和性が高いと感じています。観劇後に意見交換の場があればブラッシュアップできると感じています。高校の大会に出場経験があり、聾学校の公演で、手話と字幕で上演をするスタイルに感銘を受けました。もっと話が聞きたかったのですが、あまり立ち話できる場所もなく、時間がきっちり決まっていたりして、深くお話できなかったのが残念でした。コーヒーを片手に気軽に話せる場があれば。」

また、大学生だけでなく、神戸市に住む老若男女が気兼ねなく参加できるオープンな場所であってほしいともいいます。

「前回の催しが面白かったから、次も行ってみたいようとなるぐらい、市民の人たちの暮らしに浸透しているようなホールであってほしいです。」

草加さんは「お芝居や展示をするわけでもないけれども、そこに来て交流する、誰かと話をする、待ち合わせをする、そんな市民に開かれた場所になるのも劇場の大きな役割ですね」と言葉を添えました。

田中さん「無料開放デーをつくり、いろんな人が気軽に訪れるようにしてほしい」

田中凛さんは神戸大学で音楽学を学び、2024年9月から2025年7月まではドイツのライプツィヒ大学に交換留学し、現地のオーケストラで演奏活動を行っていたといいます。留学先の街の中心部にある大きなコンサートホール「ゲヴァントハウス」では、ほぼ毎日コンサートが開かれ、ライプツィヒにゆかりのある作曲家の音楽祭が年に2回ほど開催されているそうです。

「ゲヴァントハウスの催しで印象に残っているものが無料開放イベント『Hereinspaziert! (さあ、お入りください!)』です。専属オーケストラの演奏が誰でも聴けて、予約は必要ですが誰でもバックステージツアーでホールの裏側を体験したり、オルガンを実際に試奏できたりと、音楽に触れる機会がたくさんあって、1日に8000人ほど来場したとSNSで見ました。普段、劇場やコンサートホールに来ない人でも、無料で誰でも行けるのであれば行ってみようという人がいるだろうから新しい神戸文化ホールでも、無料で市民に開かれる機会があればと思いました。」

また、交響楽団に所属するアマチュアの演奏者としての意見として、神戸市には神戸市室内管弦楽団と混声合唱団と子どもと一緒に何かする企画はあるものの、学生や社会人がいっしょに何かをする催しが少ないので、市民がプロと関わる機会があればと語りました。

田中さんの話を受けて、草加さんは「ライプツィヒはかつて旧東ドイツの小さな都市でしたが、この街のことを音楽の力を通じて世界中の人々が知っているということはすごいことだと改めて感じた」とコメントしました。

美山さん「練習室を使いたい」

美山青空さんは中高まで吹奏楽やオーケストラなどでコントラバス奏者として活動し、神戸大学の進学をきっかけにYAMANO BIG BAND JAZZ CONTESTに参加。2年生の頃にはコンサートマスターを担当し、27年ぶりに個人賞を受賞されています。関西セレクションバンドというビッグバンドでは今年度のコンサートマスターに就任し、高槻ジャズストリートや大阪ビッグバンドジャズフェスティバル、またSwing Jazz Cruiseといった神戸の学生主催のジャズのイベントなどでライブ活動をしていると語りました。

「僕が目にしたのは練習室です。ジャズのビッグバンドは17名の編成ですが、リハーサルの環境を確保するのが難しいです。まず『ピアノがある練習室』を探すのが難しいです。自分が扱うコントラバスという楽器は1m80cmあるのでそれを持って移動するのがいつも大変です。だから三宮駅からすぐの場所にリハーサルできる場所ができるなんて！ 重宝させていただきます。」

また、神戸文化ホールが神戸の街の中心部に立つことをきっかけに、神戸のジャズストリートのライブをもっと拡大させて、ホールを中心にして、市民参加型のジャズストリートができればジャズ界隈が活

性化すると語ります。

「大阪の高槻ジャズストリートには市民やプロの人たちも、たくさんの方が参加していますが、神戸市内でもできたら最高です。北野あたりのカフェやレストランなどで小規模な編成でライブをしていることはありますが、新しいホールができることをきっかけとして、何か新しい大きなライブができたら、喜んで参加します。」

草加さんは2部前半を総括してこう語りました。

「若い人たちからいろんな希望を聞きました。伊東さん、どうしたらいいでしょう？」



伊東さん「継続性が大事」

伊東さんは若手の人たちの願望を聴きながら思ったことは「継続性」だとパネラーたちにやさしく語りました。

「どうやって活動を続けていくのか。そのためには、きっと『やりたい』だけでは済まない。例えば実行委員会をつくるとか、その次には、どうやったらそれを持続・実現させることができるかを考えることが必要で、行政はそんなに頼りにしないほうがいい。彼らには説明責任が必要で、『若者たちが楽しむために市民の税金を使うな』と言われてしまう。だから、例えば劇場に行くことに障壁・バリアがある人々のために何かをすとか、行政が納税者や議会に説明できる何かを用意する必要があると思いました。」

未来の文化をどう育てる？ 劇場とまちの新しい関係

第2部後半となり、草加さんは林さんにも感想を求めました。

林さん「若いスタッフたちを育成するシステムが必要」

林さんは若手・学生たちの意見や夢を聞いて「その夢の実現をサポートする人材が重要だ」と語りました。前半の話の中では「つくる視点」「見る視点」「支える視点」の3つあり、その中の支える視点については、伊東さんが言うように行政に依存しすぎないようにと強調します。

「自分たちでアートマネジメントしていく、右脳と左脳のバランスを上手に使いながら前に進めていくのは重要だと感じています。」

仙台市には学都、楽都、劇都といくつかの異名があり、神戸同様に若い人がたくさんいるといいます。

「若い制作者たちが疲弊してやめていくのをたくさん見てきたので、そうなってほしくない。職業人としての制作者がいる劇場と学生が交流して、そういうプロたちから学ぶことによって、無駄な試行錯誤が減ります。若い制作者と劇場がつながっていくといいなと思います。」

草加さん「なぜ制作者はやめていかざるを得ないのでしょうか？」

林さん「僕は35歳クライシスと呼んでいますが、35歳ぐらいで周りを見回すと、家庭を持ち、安定した仕事を持ち、自分はどうかと急に不安になるタイミングが来ると言われています。ほかにも厳しい労働環境ややりがい搾取が、若い人たちのやる気を失わせている側面もあると思います。」

その後、林さんの話を踏まえ、第2部後半は神戸はどう変わるか、どう変わってほしいかをパネラーが語る流れとなりました。イベント終了後に回収したアンケートでも反響の多かった話題を中心に、ダイジェストでご紹介します。

楠元さん「文化の存続は市民の働きかけが大事」

楠元さんは伊東さんや林さんが語ったように「行政に依存しすぎないという視点は大事だ」とご自身の研究成果を踏まえて話しました。

「私が大学院で研究対象にしていた神戸国際フルートコンクールは、神戸市が中止しようとしたのですが、市民からの声かけで復活したいきさつがあります。行政が予算に対して採算が合わないと判断した時に、市民がどういう働きかけをして、当事者意識を持って継続性のある事業をつくっていくのかは大切だと考えています。」

継続性のプロセスを4つのステップに区切って楠元さんは解説しました。

1. 市民に文化ホールをいっぱい使っていただく、その興味を引くための視点
2. 参加してもらう
3. リピーターになってもらう
4. 主体的に活動に繋げていく

これらのプロセスを経て、神戸が文化活動によって元気になることを期待していると語りました。

ういかさん「市民にとって創作物が身近なものになるようにしたい」

兵庫県西宮市出身のういかさん（劇団温冷兼用）は小学生の頃から演劇が好きだったと話しました。

「子どもの頃に出かけられる場所の限界が三宮でした。迷子にならない駅近に新ホールができるのはありがたく、子どもたちにとっても観劇が身近になればうれしいです。」

また、就活生としての体験談を語りました。

「面接などで『演劇をしています』というと、変わった人という反応があります（笑）それで演劇が身近になることで普通の人だと思ってもらえるようになればと思ひまして（笑）そのためにも、市民が演劇や絵画など創作物に対して身近なものになるまちになることを期待しています。」

ういかさんの就活体験談を受けて、草加さんは「まだ社会は60年代なのか」と感じたといいます。

「いろいろな表現ができることが演劇の效能だとわたしたちは思っているけれど、そうじゃない会社の人たちの考えを鍛えていかなければいけない。それも新・神戸文化ホールの大きな役割だ」と語りました。

中村さん「震災など当事者性の薄れる出来事を演劇の想像力で未来に残したい」

中村さんからは、高校時代に古本屋やレコード屋に行くのが好きだったエピソードや、大学でソウル文学を研究している中で知った、ソウル大学周辺の本屋がコンセプトがあって面白いことなどさまざまな話題提供がありました。

日々催しが変わるホールの中だけでなく、まちにあるインディペンデントな小さなお店が変わらないという風景の中にもアートがあり、それがまちの記憶だということ、自由に表現できる空間が大事で、いま話しているテーマ「劇場とまちの新しい関係をどう変化していくか」についても「変化することがいいことではないのでは？」と考えているといいます。

「『阪神淡路大震災 1.17 の集い』に参加して驚いたのは、実は高齢者ではなくて若い人が意外と多かったことです。震災から30年過ぎて、直接の記憶を持たない世代が多くなっている中で、例えば市民

が実は何を考えているのかをリサーチする段階から始めるクリエイションが大事なのではないかと。つまり、震災の記憶の当事者性のなさを、想像力で埋めることが演劇の1つの役割なのかなと私は思っています。劇場にも、市民の声をすぐにアーティストが見られる状況があればいいのでは考えました。」

草加さん「記憶をつくっていくのは重要なことですし、新しいだけがいいことではないので、その過去の活動や、自分たちのまちがつくってきた活動を掘り起こしていくのも重要な作業になると思います。そうすることによって初めてサスティナブルになっていくということかもしれません。過去を捨てて前に行くんじゃなくて、過去の上に未来をどうつくっていくのかという視点が重要というお話だと感じました。」

川嶋さん「海外を視野に入れた、ノンバーバルなコミュニケーション」

甲南一座の川嶋緒美さんは小中高と音楽を、大学から演劇をはじめたことから、音楽は言語がいらぬコミュニケーション方法だと感じたそうです。

「三宮駅直通の場所にホールが誕生し、外国人が来やすい環境になることで、言語が通じなかったとしてもコミュニケーションを取るきっかけになるような場所になればと思っています。話すきっかけが生まれることで、まち全体がより開かれた場所、賑わいのある空間ができることに期待しています。」

阪崎さん「公演が終わったあとの交流の場がほしい」

続いて甲南一座の阪崎友哉さんも民野さんと同じく、観劇後に会話ができる環境があればと話しました。

「映画を見るのが好きな友だちがいるんですけど、演劇はあんまり、ともったいないことを言っています。個人的にはそういう人を誘ったり、関わりをつくることで、まちが豊かになっていけば素敵やなと思いました。」

田中さん「三宮に移ることでさらに魅力的な場所になる」

田中さんは「新ホールが三宮に移ることで、洗練されたファッションなど都会的な部分を併せ持った場所だから魅力的な場所になる」と期待します。

「大倉山にある神戸文化ホールは、自分が出演したり、インターンシップで行かせてもらった印象としては、三宮より静かで落ち着いていて、周りに立ち寄る場所が少ないという印象だったので、三宮に新ホールが誕生することで新たな人のつながりができたり、文化の交流が生まれると思っています。32階建なら目立つので神戸の新しいシンボルになると期待しています。」

草加さんは「劇場階は4階から上であり、搬入面などの手間がかかるものの代わりに市民が集まりやすい場所が獲得できている。すべてを満足させるのは難しいですね」と背景を語りました。

美山さん「ジャズのストリートライブがしたい！」

美山さんは前半に語った高槻ジャズストリートの例について語ります。

「大阪の高槻というまちでジャズイベントが成功していて、日本でジャズがはじまったとされる神戸じゃないのがもったいないと感じています。ひとつ注目しているのが三宮クロススクエアという神戸市の構想です。」



パースはイメージ

車道を 10 車線から 6 車線に減らし、広場空間をつくるという構想です。「広場ができるならストリートライブもできるのでは？」と美山さんは期待を寄せました。また、実現に向けた構想を語ります。

「高槻ジャズストリートは入場料が全部無料で、基本的に T シャツの販売を原資としてなんとか運営しようとしています。でも毎回赤字らしくて、毎年、『今年で終わるので T シャツを買ってください』とホームページの最後の方に出てきます（笑） ですので、例えばプロが出演する神戸文化ホールなどの演奏を有料にしてストリートライブは無料にするなどしてジャズイベントを実現できないかと考えています。また、高槻ジャズストリートの運営はすべてボランティアで構成されていますが、神戸にも熱意のある市民がたくさんいると思うので、そういった方々と共に市民参画できたら僕はうれしいです。」

伊東さん「どう変わってほしいかではなくて、どう変えていくのか」

パネラーの話を受けて、伊東さんはひとつの提案をしました。

「このまちはどう変わっていくかとか、どう変わってほしいのかじゃなくて、自分たちがどう変えていくのかなんだと思うんです。今日は良いきっかけなので、集まった学生のみんなで何かの催しの実行委

員会を作りませんか？ 夢を語っているだけでそのまま終わっちゃうのはもったいない。今日は大人たちもたくさんいるし、彼らからうまく資金を出してもらえるように仕掛けていく。そのためのアイデアを出してくれる先生たちも今日のお客様の中にいるし、会場には劇場関係者の顔も見えます。大人の知恵をもらいながら、本当にやっていこうよ。その動きを次の後輩にも伝えながら、本気で取り組むことが大事だと思いました。」

草加さん「心豊かな生活のために、が劇場法の理念」

「劇場法（劇場、音楽堂等の活性化に関する法律）の前文の最後に『心豊かな国民生活及び活力ある地域社会の実現ならびに国際社会の調和ある発展を目指すために、この法律をつくる』と書かれている」と草加さんは語ります。

「これは劇場法の理念です。劇場法は、劇場・音楽堂等を活性化させるための方法・法律かと思って読んでみると、実は劇場・音楽堂があるまちをつくるための法律なんです。心豊かな国民生活及び活力ある地域社会をつくるために劇場法を定めたと考え、劇場・音楽堂をそのためにどう活かしていくのか、ということを考えていく必要があるかもしれません。」

草加さんは伊東さんが最後に語ったように「小さな出会いを演出することを100回ほど続ければ大きな出会いになってくるかもしれない」と語りました。

草加さん「今日は時間がなくて世代間交流できませんでしたが、若い人たちが考えていることを実現できるサポート、アートマネジメントを神戸市や新しいホールの運営者にはしていただきたいです。伊東さん、林さんからいただいた情報の中から取捨選択して神戸の文化に活かしていくことが、これからの神戸市の使命でもあり、それを運営する組織の役割でもあると考えていきたいです。皆さんもぜひそれを手伝っていただいて、支援していただくことが今日のお出会いにとって一番重要なことであると確認して、今日の締めにしたいと思います。」

